

冬の蜂

那珂孝平

田畑書店

冬

の

蜂

田畑書店

那珂孝平
な か とうへい

1904年 新潟県小千谷市に生まれる

1922年 逓信省講習所卒

『文藝春秋』編集同人、『集団』同人
をへて、1932年日本プロレタリア作
家同盟に加入。同盟解散後は『人民
文庫』に参加。敗戦前年、横浜事件
に連座して検挙された。戦後は出版
社などに勤務の傍ら『星霜』同人と
して創作をつづける。

著 書 『菊池寛』（日新書店）

現住所 東京都北区赤羽西 1-1-11

仲孝平

冬の蜂

定 价1600円

1981年12月20日

第 1 刷 发 行 （発行部数2000部）

著 者 那珂孝平

発行者 石田 明

発行所 株式会社 田畑書店

〒107 東京都港区赤坂4-8-19 表町ビル301号

電話代表03-403-5819 振替東京5-103763

印刷・中和印刷 装本印刷・アジア企画群 製本・山本製本所

©1981

0093-930157-4429

冬の蜂 目次

ある死ある生 5

武田麟太郎回想 49

戦中挿話 95

山手線風景 123

天地開闢 143

冬の蜂 187

創作集

冬の
蜂

ある死ある生

夏の好きな沖も、この夏のさかりは特別暑さを感じて、日課の散歩も怠りがちだった。ちょっと歩いても汗びっしょりになるのが閉口だった。毎夏一度は海へ行き、都内のプール通いするのだが、それもやめた。人の混むところも閉口だった。

三部屋しかないせまい家の中も、時刻によって涼しい場所があるもので、沖はその都度そこへ移動し、頭に枕をあてがって本を読んだ。消夏法の一つとして手応えのあるものがあるのいいと思って『アンナ・カレーニナ』を読んでいた。この小説は四十年前に一度通読していた。先年八十八歳でなくなった志賀直哉は一種の不精者だったそうで、六十すぎから初めて『アンナ・カレーニナ』を読み、若い時この小説を読んでいたら小説を書けなくなったかも知れないと語った、という噂があった。

沖は十数年前の真夏の昼、銀座の歩道で志賀さんを見たことを思い出した。沖は書店の入口に身をよせて志賀さんの通りすぎるのを見送った。写真や作品で知りつくしているつもりだったが、実物を見るのは初めてだった。その時の志賀さんは七十三、四で、渋谷の新居に移ってまもないころと思われる。背の高い、引き締った姿勢だった。ある將軍の肖像を思わせるヒゲで、眉はまだ黒く、まなざしは光っていた。パナマ帽から背広、靴まで白一色で、ステッキを振り、外むき

の大股の足どりで、数寄屋橋のソニーの側から現われて四丁目の交番の人波の中へ消えていった。沖はあの年まで生きて、真似事でもいいからあんな風に歩いてみたいと思ったのだが、もうその年齢に近くなっていた。

沖はむっくり立ち上がり、残暑の中を散歩に出た。こちらは半袖のカッターシャツにズボンという軽装で、それでも靴は先年やめた会社から送ってきた中元の商品券で買ったばかりだった。読みかけの『アンナ・カレーニナ』は片手に持った。

家から五分の赤羽駅の国電で池袋へ出た。開通もない地下鉄有楽町線で銀座へ出た。そして銀座線地下鉄にのりつぎ、浅草へ行った。雷門の交番の前に立った沖は、仲見世を通り抜け、公園を一巡した。沖の散歩はスタスタと勤勉に歩くだけで、風情のないものだった。できてまもない大型ビルを思わせる五重の塔の前には立ち止まって仰いだ。赤軍派に爆弾を仕掛けられそうな有名会社が長年かけて鉄とコンクリートと石と塗料で造ったものだった。

浅草は沖には、半世紀に及ぶなじみ深い場所だった。いろいろなものがコミになって変ってゆく。そのすきまに古いものがすこしは残っていた。その一つは吾妻橋寄りの角の神谷バーで、沖はそこへ入って電気ブランで暑氣払いをした。

元の交番の前に戻った沖は、バスで川を越えて向島の百花園へ行った。なにもかも大型になった東京で、ここは今では小じんまりした庭園にすぎなかった。歌や句碑ばかり多く、そのくずし字を読む人はなかった。秋の七草の名所で、沖は萩のトンネルをくぐって、池のそばの屋根のあ

る休憩場に腰を降ろした。沖のように遠くからくる人間はいないらしく、閑散としていた。今の知事になってからこういうところは無料になったので、子供連れの近所の妻君たちと、夏休みの終りも目睫の、宿題の写生に専念している小学生のグループだけだった。

沖はくつろいでタバコに火をつけたとき、腰掛けの上に誰かが置いた古びた一冊の文庫本を見つけて手にとった。それは先生のものであった。沖は思わずなつかしい気がして目次を繰ってみた。大正四、五年頃の、沖のもっとも好きだった短編を集めたものであった。それにしても、今どき先生の作を読む人はめずらしかった。めずらしく思うのは沖の不謹慎かも知れないが、事実にはちがなかった。

先生は、三十年前、今度の戦争で日本が敗れるまでは、文壇に大きな力を持っていた人だった。先生は大正四、五年ころ、新進作家として文壇にデビューしたが、大正の後期には純文学から遠ざかり、新聞と婦人雑誌の連載小説で盛名を馳せる人になり、その間に若い同人を集めて定価十銭の小さな『文藝春秋』を始めた。それが変容に変容を重ねて商業的大雑誌になり、その社長になった人だった。

敗戦は、なんといっても先生にとってショックにちがいがなかった。あきらめのいい先生は『文藝春秋』を自ら放棄し、一時求められて映画会社の社長にもなり、また得意の史譚物などを書いたが、往年の精彩はなかった。

公職追放の指令を受けたまま、昭和二十三年三月、狭心症であわただしく死去した。六十一歳

だった。先生の墓は多摩墓地にある。大学在学中から『文藝春秋』誌の同人だった川端康成が、先生の墓石の文字を書いている。

長く歩くと股ずれがするほど肥満し、心臓機能の充分でなかった先生は、もともと自分の長命を信じていなかったろう。六十一という年齢は、先生にとって不足でなかったと思う。先生は食道楽でもあったので、食糧事情の悪い戦中戦後は生きるに価しなかったかも知れない。

先生は現実万能をモットーにしていた。人に短冊や色紙を求められると「生活第一、芸術第二」と書いた。この信条は若いときからのもので、学生時代の同人雑誌に、人生は短いが芸術も短く、シエクスピアの戯曲も今に地下のみみずが啜うだろう、などと書いていた。「来て見ればさほどでもなし富士の山 釈迦や孔子もかくやあるなん」というような、旧幕時代の虚無主義者の歌なども好んでいたが、実生活の上では、将棋やピンポンのような単純な遊戯でも負け嫌いだ。思いきりよく、現世だけを信じた人だった。

戦前、先生の全集は三回出て、出版広告に文豪とか文壇の大御所とか誇大の文字があったが、通俗小説が過半数を占めていて、今は東京の古本屋をまわっても、その片影もない。先生の作は二、三冊の文庫本のなかで見えるはかなくなった。もっとも、今から十五年ほど前、文藝春秋社は、創業者だった先生の十巻物の全集をさりげなく出しているが、あまり売れたようすはない。この全集には年譜年表もなく、目次に誤植などもある。この十巻物の全集は、沖の書棚の最上段に置いてある。

「一人の人間は本当の意味では一つの時代しか生きられない気がする。殊にその人が、或る時代にピッタリ適応すればするほど、次の時代に生きられない気がする」と先生は書いている。先生の一生は、その言葉通りのようだった。が、戦争と敗戦で、時代の転換が意外に早く、先生の生前に來たことは不本意だったと思われる。

百花園の腰掛に倚り、沖がこんなことを思ったのは、沖は十九から二十一歳までの三年間、先生の書生として養われ、一時は先生の好感を得た若者だったにかかわらず、沖の若気の過誤から先生に破門追放された、という過去があったからである。その影響は沖にさまざまな傷を残したが、いつかその傷痕は消えていた。先生に追放されたことが、沖にとって愛憎をとめないながら生きて行くうえに張り合いだったことは否めない。沖は手にしていた先生の文庫本を元の場所に置いて立ち上がり、スタスタと公園を出てバス停を目指した。

家へ帰った沖は、踏台を使って先生の全集から二、三冊をとって机の上に置いた。「半自叙伝」と、毎月『文藝春秋』に書いていた断片的な処世観を集録したものだった。

沖は洗い立ての浴衣をひっかけ、玄関から数歩の距離、斜め前の銭湯ののれんをくぐってさばさばした。そこは沖が妻の慶子と共に三十五年も住み、四人の子どもの育った、赤羽の古めいた陋巷だったが、自動車の通行を禁じた一郭であり、沖たちにとっては小さなオアシスにちがいなかった。子どもたちも結婚して、せまい家を出ていた。

沖はコップにいっぱい入れた氷にウイスキーをかけ、もう一度暑氣払いをした。そしてひさし

ぶりで先生の本をひもといた。

二

沖が初めて小石川林町の先生の家を訪ねたのは、大正十二年八月だった。関東大震災の起こる一カ月前だった。『文藝春秋』誌の創刊はその年の一月からだ。沖は書店で十銭出してその薄い雑誌を買った。二時間もあれば隅から隅まで読める雑誌だった。

沖はその三、四年前から、先生の書くものはなんでも好きで読んでいた。沖が雑誌や本をなんでも見ることができたのは、前年までの四年間、取次店の東京堂に奉公していたからだ。本ばかり読んでいる我のつよい小僧だったので嫌われ、本人も居づらくなり、そこから脱獄でもするようにやめてしまった。

東京堂をやめてからしばらくたって通信省講習所を受験して合格し、半年の教育を経て貯金局原簿課の雇員になった。講習所へ通ううちはよかったが、現場へ配置されたら、沖にとってはそこはやはり獄屋のようなものだった。沖と同じような少年がたくさんいて、算盤と算用数字を書くことだけが仕事だった。

沖は『文藝春秋』誌の先生の編集後記に、投稿を歓迎するという文字を見て、短い文章を書いて送った。「怨言数萬」という題をつけた。

そのころ沖は、神田のYMCAで荒畑寒村らの社会主義同盟の演説会を聞いた。弁士のなかに作家の江口渕がいた。江口は後年、沖も参加したプロレタリア作家同盟の委員長もし、先生と同年代の人のなかではもっとも長命で、この正月、八十七歳でなくなつた。西も東も弁別できない沖の心に、社会主義の思想が最初にしみこんだのは仕方がないことだつた。沖の文章にもそれはにじんでいた。

折り返し先生から手紙が来た。「原稿面白く拝見、三月号にのせる」という簡単な言葉と、原稿料として五円の小為替が入つていた。思いがけないことだつた。沖が貯金局から貰つていた月給は二十四、五円だつた。部屋は須田町に近い、青物市場のある連雀町奥の、印刷局へ勤めてゐる人の二階を借りていた。印刷局は神田橋にあつた。

いつも金に不自由だつた沖は、先生から送られてきた金で、上野広小路の松榮寿司へ行つた。東京は今のうちに広くなく、自動車もまだで歩行しやすかつたから、たいがいのところは歩いた。松榮寿司はうまいのと大きいので客を呼び、一口に頬張れないので、職人はにぎりの厚いまぐろに包丁を入れて二口に食えるようにして出す店だつた。

沖はその後三回、『文藝春秋』に短い文章をのせて貰つた。だんだん貯金局が嫌になり、講習所修了者は三年間の勤務を義務づけられていたが、こども脱獄でもするようにやめてしまった。勤めをやめればその月から食つていけなかつた。東京に叔父、伯母がいて、最初はすすんで世話をしたが今は相手にしなかつたし、沖も反抗的に顔も出さなかつた。沖は一時しのぎに郷里へ

帰ることにした。帰るまでに、一度先生に会って行きたかった。なんとなく躊躇されたが、役所通いに用いていた袴をはいて出かけていった。

真夏の日中で、ある恐れを感じながら、先生の家の中に入り、玄関に立った。はたして「忙中謝客」の看板が格子戸にぶらさがっていた。看板はカステラの箱の底を打ち抜いたものだった。沖がその前にたたずんでいると、少女のような女中が現われて玄関の畳に両手をついて頭を下げたので、格子の中へ入り、名刺位の紙片に自分の名前を書いたものを渡した。いったん引込んだ少女が沖を二階へ案内した。沖は紫檀の机のそばの座蒲団に座した。机上也机のまわりも、本や原稿の山が崩れそうに積んであった。沖の気持も落ち着いてきた。

どたんどたと足音がして、先生は上がってきた。先生は目をパチパチして不愛想に「やあ」と言ったが、まもなく肉の厚い頬に微笑を浮かべた。先生は、沖が坊主頭で小倉の袴をはいた少年なのが意外だったらしく、「僕は君、君が二十六、七の人かと思ったよ」と言った。沖は聞かれることを自由に話した。沖は先生の将棋の相手をさせられた。一番目はアツというまに終わった。二番目は歩三步でねじ伏せられた。寿司がとられ、先生と一緒に食った。辞去しようとして立ったとき、先生は、

「君はこれからどうするの」と言った。

「田舎へ帰ります」と沖は答えた。

「君は僕の家へ来てもいいんだよ。もっと大きい家へ越すから、来てもいいんだよ。しかし、一